

### (1) 秋まき小麦の萎縮病

秋まき小麦の萎縮病は平成22年に道内で初めて発生が確認され、これまでに空知、石狩、十勝地方の複数地域、上川及びオホーツク地方の一部地域で発生が確認されている。本病の発生地域は徐々に拡大しており、令和3年にはこれまで一部ほ場のみで発生が確認されていた地域において、面的な発生拡大事例も確認された。

本病の病原ウイルスは土壌中の微生物 *Polymyxa graminis* により媒介される。秋季のうちにウイルスが小麦の根から感染し、融雪以降に葉のモザイクや黄化、捻転などの症状が認められ、生育不良となる。本病の症状は既に全道で発生が確認されている縞萎縮病と似た点が多いため、目視のみでの診断では縞萎縮病と誤認する可能性があるため注意が必要である。縞萎縮病に比べ、「きたほなみ」では黄化の程度がやや強い他、ウイルスの増殖適温が縞萎縮ウイルスよりも高く、症状が6月まで継続することも多いため、そのような場合には萎縮病の発生が疑われる。なお、本病は海外製のエライザキットで診断可能である。

本病は登録薬剤がなく、耕種的な対策が重要である。連作や短期輪作を避けることはもちろんであるが、特に播種時期が早いとウイルスに感染する機会が増えるため、適期播種を厳守する。他の土壌病害と同様に、発生地域あるいは発生ほ場を拡大させないために、発生ほ場での作業機に付着した土壌を他のほ場に移動させないこと、早期発見に努めることも重要である。



写真 発病株(花野菜セ 佐々木 原図)



写真 6月の症状(花野菜セ 佐々木 原図)